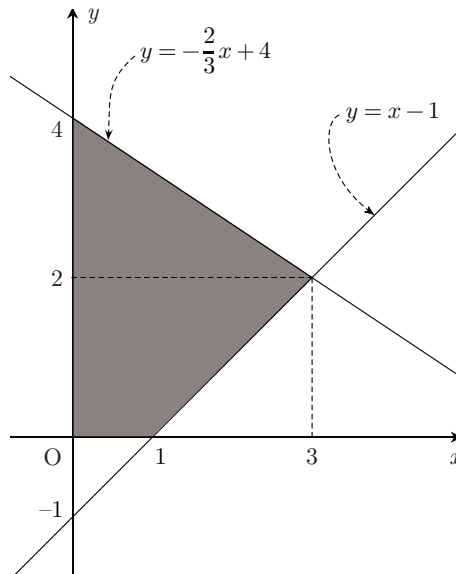


2024年度 早稲田大学 社会科学部 数学

1

(1) D は下図の網目部となる。ただし、境界上の点を含む。



(2) $-2x + y = k_1$ ($y = 2x + k_1$)①

とおくと、 xy 平面において直線①と D が共有点をもつような k_1 の最大値が求めるものである。

①は、傾き 2, y 切片 k_1 の直線を表すから、 k_1 が最大となるのは、上図より①が点 $(0, 4)$ を通るときで、求める最大値は、

$$-2 \cdot 0 + 4 = 4 \quad \text{.....(答)}$$

である。

(3) $2x + y = k_2$ ($y = -2x + k_2$)②

とおくと、 xy 平面において直線②と D が共有点をもつような k_2 の最大値が求めるものである。

②は、傾き -2 , y 切片 k_2 の直線を表すから、 k_2 が最大となるのは、上図より②が点 $(3, 2)$ を通るときで、求める最大値は、

$$2 \cdot 3 + 2 = 8 \quad \text{.....(答)}$$

である。

(4) $ax + y = k_3$ ($y = -ax + k_3$)③

とおくと、 xy 平面において直線③と D が共有点をもつような k_3 の最大値が求めるものである。

③は、傾き $-a$, y 切片 k_3 の直線を表すから、上図を参考にし、傾き $-a$ が $-\frac{2}{3}$ より大きいか否かで分類する。

(i) $-a > -\frac{2}{3}$, すなわち、 $a < \frac{2}{3}$ のとき

k_3 は、③が点 $(0, 4)$ を通るとき最大となるから、このとき、

$$k_3 = a \cdot 0 + 4 = 4$$

である。

(ii) $-a \leq -\frac{2}{3}$, すなわち、 $a \geq \frac{2}{3}$ のとき

k_3 は、③が点 $(3, 2)$ を通るとき最大となるから、このとき、

$$k_3 = a \cdot 3 + 2 = 3a + 2$$

である。

以上より、求める最大値は、

$$\begin{cases} 4 & (a < \frac{2}{3} \text{ のとき}) \\ 3a + 2 & (a \geq \frac{2}{3} \text{ のとき}) \end{cases} \quad \dots\dots(\text{答})$$

である.

[解2]

$$f(x, y) = ax + y$$

とおき, D における $f(x, y)$ の最大値を M とおく.

まず, x を固定して考えると, $f(x, y)$ は y の増加関数であり, y の変域は,

$$0 \leq x \leq 1 \text{ のとき } 0 \leq y \leq -\frac{2}{3}x + 4, \quad 1 \leq x \leq 3 \text{ のとき } x - 1 \leq y \leq -\frac{2}{3}x + 4$$

であるから, いずれにせよ,

$$M = f\left(x, -\frac{2}{3}x + 4\right) = ax + \left(-\frac{2}{3}x + 4\right) = \left(a - \frac{2}{3}\right)x + 4$$

である.

次に, x を $0 \leq x \leq 3$ で動かすと, M は x の高々1次関数であるから,

$$M = \max\{f(0, 4), f(3, 2)\} = \max\{4, 3a + 2\}$$

である. ただし, $\max\{p, q\}$ は, p, q うち小さくない方を表す.

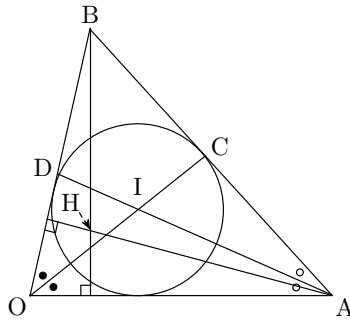
(2) $a = -2$ のとき,

$$M = \max\{4, -4\} = 4 \quad \dots\dots(\text{答})$$

(3) $a = 2$ のとき,

$$M = \max\{4, 8\} = 8 \quad \dots\dots(\text{答})$$

$$(4) \quad M = \begin{cases} 4 & (a < \frac{2}{3} \text{ のとき}) \\ 3a + 2 & (a \geq \frac{2}{3} \text{ のとき}) \end{cases} \quad \dots\dots(\text{答})$$



(1) 直線 OC (直線 OI) は $\angle AOB$ を二等分するから、

$$AC : BC = OA : OB = 6 : 5$$

であり、

$$\overrightarrow{OC} = \frac{5\overrightarrow{OA} + 6\overrightarrow{OB}}{6+5} = \frac{5}{11}\vec{a} + \frac{6}{11}\vec{b}$$

……(答)

と表される。

(2) 直線 AI は $\angle OAB$ を二等分するから、

$$OI : IC = AO : AC = 6 : \frac{6}{6+5} \cdot 7 = 11 : 7$$

であり、(1)の結果も用いて、

$$\overrightarrow{OI} = \frac{11}{11+7}\overrightarrow{OC} = \frac{11}{18}\left(\frac{5}{11}\vec{a} + \frac{6}{11}\vec{b}\right) = \frac{5}{18}\vec{a} + \frac{1}{3}\vec{b}$$

……(答)

である。

[参考]

メネラウスの定理より、

$$\frac{OD}{DB} \cdot \frac{BA}{AC} \cdot \frac{CI}{IO} = 1$$

$$\therefore \frac{6}{7} \cdot \frac{11}{6} \cdot \frac{CI}{IO} = 1$$

$$\therefore \frac{CI}{IO} = \frac{7}{11}$$

これと、(1)と組んで、

$$\overrightarrow{OI} = \frac{11}{7+11}\overrightarrow{OC} = \frac{11}{18}\left(\frac{5}{11}\vec{a} + \frac{6}{11}\vec{b}\right) = \frac{5}{18}\vec{a} + \frac{1}{3}\vec{b}$$

……(答)

で表される。

(3) $|\overrightarrow{AB}|^2 = |\overrightarrow{OB} - \overrightarrow{OA}|^2 = |\vec{b} - \vec{a}|^2 = |\vec{b}|^2 - 2\vec{a} \cdot \vec{b} + |\vec{a}|^2$

より、

$$\vec{a} \cdot \vec{b} = \frac{1}{2}(|\vec{a}|^2 + |\vec{b}|^2 - |\overrightarrow{AB}|^2) = \frac{1}{2}(6^2 + 5^2 - 7^2) = 6$$

……(答)

である。

(4) $\overrightarrow{AH} = \overrightarrow{OH} - \overrightarrow{OA} = (s\vec{a} + t\vec{b}) - \vec{a} = (s-1)\vec{a} + t\vec{b}$

……(答)

$$\overrightarrow{BH} = \overrightarrow{OH} - \overrightarrow{OB} = (s\vec{a} + t\vec{b}) - \vec{b} = s\vec{a} + (t-1)\vec{b}$$

……(答)

(5) $AH \perp OB$ かつ $BH \perp OA$ より、

$$\overrightarrow{AH} \cdot \overrightarrow{OB} = 0 \text{ かつ } \overrightarrow{BH} \cdot \overrightarrow{OA} = 0$$

$$\therefore \{(s-1)\vec{a} + t\vec{b}\} \cdot \vec{b} = 0 \text{ かつ } \{s\vec{a} + (t-1)\vec{b}\} \cdot \vec{a} = 0$$

展開して、 $|\vec{a}| = 6$ 、 $|\vec{b}| = 5$ 、 $\vec{a} \cdot \vec{b} = 6$ を用いて整理すると、

$$6(s-1) + 25t = 0 \text{ かつ } 36s + 6(t-1) = 0$$

$$\therefore 6s + 25t = 6 \text{ かつ } 6s + t = 1$$

よって、求める s 、 t の値は、

$$s = \frac{19}{144}, t = \frac{5}{24} \quad \dots\dots(\text{答})$$

である。

[解2]

$\angle AOB = \theta$ とおくと, $\triangle OAB$ において余弦定理より,

$$\cos \theta = \frac{6^2 + 5^2 - 7^2}{2 \cdot 6 \cdot 5} = \frac{1}{5}$$

であり,

$$\sin \theta = \sqrt{1 - \cos^2 \theta} = \sqrt{1 - \left(\frac{1}{5}\right)^2} = \frac{2\sqrt{6}}{5}$$

であるから, $O(0, 0)$, $A(6, 0)$, $B(1, 2\sqrt{6})$ とする xy 座標系がとれる.

$$(3) \quad \vec{a} \cdot \vec{b} = 6 \cdot 1 + 0 \cdot 2\sqrt{6} = 6 \quad \dots\dots(\text{答})$$

(5) (4)より,

$$\vec{AH} = (6(s-1) + t, 2\sqrt{6}t), \vec{BH} = (6s + t - 1, 2\sqrt{6}(t-1))$$

であるから, $AH \perp OB$ かつ $BH \perp OA$ より,

$$\vec{AH} \cdot \vec{OB} = 0 \quad \text{かつ} \quad \vec{BH} \cdot \vec{OA} = 0$$

$$\therefore \{6(s-1) + t\} \cdot 1 + 2\sqrt{6}t \cdot 2\sqrt{6} = 0 \quad \text{かつ} \quad (6s + t - 1) \cdot 6 + 2\sqrt{6}(t-1) \cdot 0 = 0$$

$$\therefore 6s + 25t = 6 \quad \text{かつ} \quad 6s + t = 1$$

$$s = \frac{19}{144}, t = \frac{5}{24} \quad \dots\dots(\text{答})$$

$$k > 0, a_j > 0 \ (j = 1, 2, \dots, n), a_1 = k < a_2 < a_3 < \dots < a_n \quad \dots\dots\textcircled{1}$$

であることに注意する。

(1)(2) ①より、

$$a_2 - k < a_3 - k < \dots < a_n - k$$

であるから、 $a_i - k$ ($i = 2, 3, \dots, n$) を小さい順に並べた集合 S_1 は、

$$S_1 = \{a_2 - k, a_3 - k, \dots, a_n - k\}$$

である。

よって、 S_1 の要素がすべて S の要素となる時、 $a_n - k < a_n$ に注意すると、

$$a_2 - k = a_1 = k, a_3 - k = a_2, \dots, a_n - k = a_{n-1}$$

すなわち、

$$a_2 = 2k, a_3 = 3k, \dots, a_n = nk$$

であるから、

$$a_2 = 2k$$

$\dots\dots(1)$ の(答)

$$a_n = nk$$

$\dots\dots(2)$ の(答)

である。

* $\{a_n\}$ は初項 k 、公差 k の等差数列である。

(3) ①より、

$$\frac{a_2}{k} < \frac{a_3}{k} < \dots < \frac{a_n}{k}$$

であるから、 $\frac{a_i}{k}$ ($i = 2, 3, \dots, n$) を小さい順に並べた集合 S_2 は、

$$S_2 = \left\{ \frac{a_2}{k}, \frac{a_3}{k}, \dots, \frac{a_n}{k} \right\}$$

である。

(i) $0 < k < 1$ のとき

$\frac{a_n}{k} > a_n$ より、 S_2 の要素がすべて S の要素となることはない。

(ii) $k = 1$ のとき

$$S_2 = \{a_2, a_3, \dots, a_n\}$$

である。

(iii) $k > 1$ のとき

S_2 の要素がすべて S の要素となる時、 $\frac{a_n}{k} < a_n$ に注意すると、

$$\frac{a_2}{k} = a_1, \frac{a_3}{k} = a_2, \dots, \frac{a_n}{k} = a_{n-1}$$

$$\therefore a_2 = k^2, a_3 = k^3, \dots, a_n = k^n$$

以上より、 $\frac{a_i}{k}$ ($i = 2, 3, \dots, n$) がすべて S の要素となる時、 $k \geq 1$ が必要で、

$$\begin{cases} k = 1 \text{ のときは, } a_n = (S \text{ の最大の要素}) \\ k > 1 \text{ のときは, } a_n = k^n \end{cases} \quad \dots\dots(\text{答})$$

である。

* $\{a_n\}$ は初項 k 、公比 k の等比数列である。

* $k = 1$ のとき、 a_n は S に依存する。

* $k > 1$ のとき、(3)は対数をとれば、(1)、(2)と同様の考察に帰着する。等比数列は、対数が等差数列である。